

日本古典文學大系 91

浮世草子集

岩波書店刊行

浮世草子集

日本古典文学大系 91

昭和 41 年 11 月 5 日 第 1 刷 発行 ©

定 価 1000 円



校 注 者

の 野 間 光 辰

発 行 者

東京都千代田区神田一ツ橋 2ノ3

岩 波 雄 二 郎

印 刷 者

長 野 市 中 御 所 2ノ30

田 中 忠

発 行 所

東京都千代田区
神田一ツ橋2ノ3 株式
会社

岩 波 書 店

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

解 說	三
凡 例	四五

好色万金丹

卷之一	五三
卷之二	七五
卷之三	九三
卷之四	一二三
卷之五	一三一
色道 大金 傾城禁短氣	
一之卷	一五三

新色五卷書

二之卷	一九一
三之卷	三九
四之卷	二六七
五之卷	三〇九
六之卷	三四七
一之卷	三八五
二之卷	四〇九
三之卷	四三五
四之卷	四六一
五之卷	四八七
補注	五二五
附錄	五三五

解説

本書は、本大系第一期所収の『西鶴集』上・下二冊の後を承けて、西鶴以後にあらわれた数ある浮世草子作者の中から、夜食時分・西沢一風・江島其磧の三人を選び、それぞれの作者の代表的作品と認められる『好色万金丹』(元禄七、夜食時分作)・『新色五卷書』(元禄十一、一風作)・『傾城禁短気』(宝永八、其磧作)について、新たに校訂を加え頭注を附したものである。

勿論、右に挙げた三人の作者の三部の作品の外に、文学史上逸すべからざる浮世草子の作者と作品は、他にも少なくない。しかし与えられた紙幅の範囲においては、たとえ一人に付き一作と限定するも、その全部を収録することは到底不可能である。当然そこには、何等かの方針に基く取捨選択が行われなければならない。その場合私が、作者としては、夜食時分・一風・其磧の三人を、作品としては『好色万金丹』・『新色五卷書』・『傾城禁短気』の三部を選んだについては、いささか理由がある。第一、西鶴と西鶴以後における浮世草子の発展・消長を見渡した上で、まず西鶴の〃はなしの方法〃を受け継いだ、最もすぐれた短篇作者として夜食時分を選んだ。『好色万金丹』はその第一作である。次に善き意味においても悪しき意味においても、浮世草子の出版を盛んならしめ、またその内容に多様な変化を与えた本屋作者の代表として、西沢与志、後改めて一風事正本屋九左衛門を推し、西鶴の好色本の流れを汲み、且つ巷談・実話を脚色した『新色五卷書』を採った。第三は西鶴以後の浮世草子の主流をなした八文字屋本の実作者にして、後に自らも本屋を経営したことのある江島其磧である。これは改めていうまでもあるまい。ただ何故に、龐大なる彼の作品の中からこの『禁短気』の一部を選んだかといえば、八文字屋の隠れたる作者として、毎年正月・二の替り狂言の役者評判に筆を執る傍、その合間合間に『傾城色三味線』(元禄十四)以下数部の浮世草子を断続的に発表していた其磧が、この『禁短

氣』あたりから浮世草子作者としての自信を強め、従来の型にはまった役者評判よりもむしろ浮世草子の作に力を傾け、延いては八文字屋と袂別独立して、自ら作者と名乗るに至るのである。その意味において、これは作者其積の新しい出版を記念する作品であり、第一作『色三味線』に勝るとも劣らぬほどの歴史的意義と価値を持つものと考えたからである。

右に述べた意味を一層明確にするため、次に少しく西鶴以後の浮世草子の歴史を概観しておきたい。浮世草子の歴史は、改めていうまでもなく、天和三年（六三三）刊行の西鶴の処女作『好色一代男』に始まる。しかしその下限はといえば、論者によって種々の説もあるであろうが、西鶴の歿後、評判本と浮世本を中心とするいわゆる八文字屋本の出版によって、長く上方の出版界に重きをなしていた京都の本屋八文字屋が退転する前後、作品を挙げていえば、天明三年（六三三）刊行の福隅軒蛙井作『ふくぐんけん あせじん当世諸芸独自慢』を最後として区切るべきであろう。以後上方の小説は、江戸の洒落本・読本・滑稽本・黄表紙などにその全盛を取って代られるのである。

天和より天明に至る、その間百年、これを四期に分つ。

第一期（天和三年（六三三）元禄十六（一六八三）一七〇三）

この期は西鶴の好色物・武家物・雑話物・町人物と多方面にわたる創作活動に引続いて、その歿後十年間、西鶴の模倣・追隨に終始し、専ら好色本が流行した時期である。ただこの期の中頃以後に至って、長編の時代物・やつし物の作品が現われ、また次期の八文字屋本全盛の最初となった『傾城色三味線』が出版せられていることが注目せられる。

今日我々は、西鶴に始まる新しい小説の一体を、それ以前の仮名草子から区別して、浮世草子と呼び習わしているが、これは、現代もしくは当世という「浮世」の一般的意義に即して、西鶴と西鶴以後の写實的風俗小説を総括する名称として採用せられた、文学史上の術語である。しかし浮世草子という言葉そのものは、もともと好色本と同じ意味の言葉であって、『好色一代男』に続く西鶴の初期の作品、『しよえん おおかのみ諸艶大鑑』一名『好色二代男』（貞享元）・『好色五人女』（同三）・『好

色一代女(同上)・『男色大鑑』(同四)等いわゆる好色物の作品などは、当時「好色の草紙」(『好色床談義』元禄二)・「好色本」(『御前義経記』元禄十三)、また「色草紙」(同上)とも「浮世本」(『古今四場居百人一首』元禄六、『茶傾福原雀』宝永元頃)とも呼ばれていたのである。「浮世草紙」という名称についていえば、少くとも現在知り得る限りにおいては、元禄十六年より以前の成立と認められる『色里迦陵頻』所収「小町待宵の段」の一節に見えているところが最も古い用例であるが、これも「浮世本」と同じく、猥雑な文章と春画を有する「色草紙」・「枕草紙」・「好色本」と同じ内容のものを指していったことは疑ない。或意味においては、西鶴の初期の作品は従来の猥雑な好色本とは異なる新しい好色本として登場し、男女愛欲の種々相を通して深く人生の哀歓を描き出したところに、従来の教訓的・啓蒙的・巧利的仮名草子とは区別せられるものがあったということも出来よう。

西鶴登場以前、仮名草子時代の末期、利潤を追求する出版ジャーナリズムの世界においては、すでにこの種の好色本の創作が行われていた。その中には猥雑な春本は勿論、野郎・遊女の評判記、衆道の教訓、遊里諸分の秘伝書の類までもが含まれているのであるが、中でも『たきつけ』・『もえくる』・『けしずみ』(延宝五)の三部作は懺悔物語的脚色を加え、『難波鉦』(延宝八)は遊女と客の対話形式を取入れて、小説的脚色と写実的要素において一つの進歩を示している。また『都風俗鑑』一名『都色欲大全』(延宝九)・『名女情比』(同上の第五卷「遊女情比」)・『風流恋慕水鏡』(天和二)・『好色袖鑑』(同上)など、その記述は依然として断片的もしくは羅列的紹介の範囲を出ず、多分に教訓性・実用性をとめてはいたが、とにかく「色欲」・「情」・「恋慕」・「好色」などの文字が物語っているように、当代の享樂的世相と興味本位の読者の嗜好を反映して、好色本が行われつつあったことは注目せられる。その作者は、判明している限りでは本屋が多く、判明していないものも、大部分は本屋もしくは本屋に雇われた素人作者であつたろうと思われる。『恋慕水鏡』は山の八事京都書林和泉屋(山本氏)八左衛門の作であるが、山の八自ら記すところによれば、「予恋慕水鏡を作して八百部摺、厥後源氏色遊を作りて序の心になひ千部すり、又嵯峨紅葉を述して七百部すり、ちかくは旅枕、和佐大八の通矢にひとし、そのうち役者大評判を作して二千部すり、又好色覚帳を述作して七百部に及べり」(『好色床談義』序、元禄

二)という。『風流嵯峨紅葉』(天和三)・『好色旅枕』(貞享三)・『好色覚帳』(貞享五)などは、西鶴の『一代男』と同時にしくはそれ以後の出版であるから暫く措く。いまだ仮名草子の域を脱せぬ無味乾燥な『恋慕水鏡』の如きが、恐らく枕絵本と思われる『源氏色遊』に次いで八百部も摺り出しているとは驚く外はない。従って一度西鶴の『好色一代男』出ずるや、世人争ってこれを読み、本屋こぞって好色本の出版に力を注いだことも当然である。かくして『元禄大平記』(元禄十五)の作者梅蘭堂(都の錦)が指摘する如く、「当世はたゞ堅い書物を取置て、あきなひの勝手には好色本か重宝記がまし」、「古板尽き新板起る中にも、永う流行るは好色本」という、好色本流行の時代が続くのである。

もとより西鶴の小説は、同じ好色本といっても他の作者の好色本とは同日の談ではない。そして西鶴自身は、書くことによつて次第に作家的成長をなしとげ、成長と共に取材の範囲を拡大して、好色物は勿論、武家物・雑話物・町人物に分類される多種多様な作品を書いた。浮世草子の名称が、特殊の意義においてではなく一般的意義において、西鶴に始まる新体の小説の名称として採用せられた所以である。けれども出版書肆の商業主義と作者の独創性の貧困の結果は、西鶴生前中はもとより西鶴歿後に至つても、依然として好色本の氾濫を現出した。前に述べた山の八とほぼ同時に活躍した作者に、嘯松子事西村市郎右衛門という京都の本屋がある。これも従来『新御伽』(天和三)・『小夜衣』(同上)・『花の名残』(貞享五)等、多く先行の仮名草子の怪異小説・恋愛物語・艶書集に手を入れて、部分的に遊里遊女の諸分の記述に幾分の当世色を施したに過ぎぬ程度の作者であつたが、西鶴の作品に刺激せられて、逸早く好色本を自作出版し、好色本流行のブームに便乗している。数多いその作の中でも、『好色三代男』(貞享三)と『好色伊勢物語』(同上)の二作は、たとえ西鶴の模倣・追隨とはいへ、やや見るべきものがある。しかし元禄に入つて彼が出版した十部以上にも達する好色本、たとえば『好色注能毒』(元禄五)・『好色京紅』(同二)・『好色祝言揃』(同三)等に至つては、いずれも秘戯畫入りの純然たる春本に過ぎない。山の八が「好色三部の書」と誇称する『好色旅枕』・『好色床談義』・『好色重宝記』(元禄三)亦同様である。梅蘭堂が西鶴に対抗する「好色本の達人」として嘯松子を評したのは、いささか過当の言というより外はない。

しかしてかかる上方の出版界の風潮は、漸く江戸にも波及して、貞享三年まず画俳軒石川流宣の作になる『好色江戸紫』が現われ、翌四年には、同じく浮世絵師菱川師宣によって、西鶴の『一代男』が絵本として出版せられた。流宣は絵師として日本図・江戸図・吉原図などを描き、また遊女評判記などにも筆を執っている。そのほか、後年化鳥風一派を立てて俗俳の雄と知られた本屋の主立羽不角も亦、『色の染衣』(貞享四)・『好色染下地』(元禄四)・『花の染分』(同五)を相次いで著し、やや遅れてこれも同じ俳諧師の一人と思われる桃林堂蝶麿が、『好色赤烏帽子』(元禄八)・『好色艶虚無僧』(同九)・『好色桐の小枕』(同十六)以下十数部の好色本を出している。内容・文章共に何等採るところなき春本同前の作である。

こうして見て来ると、西鶴の前に西鶴なく、西鶴の後に西鶴なしといわざるを得ない。作者の独創性の貧困である。ただいたずらに目前の好色本ブームに便乗して、露骨な性欲描写や奇抜な趣向の工夫を以て読者を釣り、売上げの増加を期待する以外に能がなかったのである。これは当時において、いまだ作者という地位が確立せられず、職業として成り立たなかった事情も考慮せられなければならない。元禄の時代にあつては、後世の如き作料の制度さえいまだなかったと思われる。従つて小説の著作と出版は、本屋もしくは絵師・板木師の片手間仕事に行われ、たとえ別個に作者が存在したとしても、本屋の依頼によって僅かの潤筆料程度で慰みに物するか、或は糊口の資を得るために本屋に雇われて、徒弟の如き待遇で商売物を製作する程度であつたと考えられる。作者として経済的独立のないところに、作者の個性の發揮は望むことが出来ない。西鶴歿後の出版界が滔々たる好色本の氾濫に押し流されて行つたのは、当然の成り行きであつたともいえる。

そうした中であつて、出色の作者といふべきものは雲風子林鴻と夜食時分の二人である。いずれも俳諧師もしくは俳諧師であつたと推定せられる、本屋作者ならぬ作者で、林鴻には『好色産毛』(元禄九以前)、夜食時分には本書に収録した『好色万金丹』の外に『座敷咄』(元禄十)・『好色敗毒散』(同十六)の作がある。ともに西鶴の衣鉢を継いで、犀利な觀察と奇警な描写を以てよく人生の機微・世相人情の動きを捉えている。ただ何分にも寡作であるために、出版界の主流

を左右するまでには至らなかった。それというのも、いまだ作者の地位が確立せられていなかったからである。

しかし彼等が続いて現われた西沢一風と江島其磧の二人は、本屋作者或は本屋の匿名作者であり、西鶴模倣・追隨という点では何等他の作者と異なるところはなかったが、脚色と趣向に複雑と新奇を加え、西鶴以来の短篇小説集の形態から長篇小説へと結構の変化をもたらし、従来の西鶴の模倣・追隨から一步を進めて、新しい傾向を作った。一風・其磧の二人については、本書所収の作品の解説において、やや詳しく説くつもりであるが、特に一風の諸作は、古典の世界を当世にやつした伝奇的色彩の濃厚な長篇物で、随所に座敷操・軍書講談・女歌舞伎の趣向を挿入して、目先の変化を図っている。これらは少くとも当時の行き詰まった出版界に新しい方向を示したものであった。なお一風の後援によって作者生活に入り、大阪・京都の本屋に寄食して、梅蘭堂・都の錦・往悔子の筆名を以て幾多の作品を出版した穴戸光風の名も、この期の異色ある作者として逸することは出来ない。その生涯は数奇を極めたもので、作者中の変り種であるが、『風流神代巻』（元禄十五）・『風流日本莊子』（同上）・『風流源氏物語』（同十六）等、古典の俗訳書が多い。またその『元禄大平記』は、当時の出版界の内情暴露、近代の作者・学者の月旦、和漢学書の紹介、三都遊里・劇壇の評判を網羅したもの、これ亦浮世草子中の変り種である。

第二期（宝永元正徳元） （一七〇四—一七一）

第一期に続く約八十年間は、これを一括して八文字屋本時代と称してもよい時期である。何となれば八文字屋本の変遷消長が、そのままこの八十年間の浮世草子の展開に密接な関係があるからである。八文字屋本とは、京都駄屋町通誓願寺下ル書肆八文字屋八左衛門方から出版せられた、浄瑠璃・歌舞伎狂言の正本、役者評判記・浮世草子の類の総称であるが、小説史に於ては特にそのうちの浮世草子を指している、更に汎くは八文字屋本の影響を受けこれを模倣した、八文字屋以外の書肆の出版にかかる末期浮世草子をも含めて呼ぶのである。しかし八十年間を更に細分すると、ほとん第三期に分れる。そしてこの第二期の八十年間は、いわば八文字屋本の初期（勃興期）に当る。

元來八文字屋は慶安の昔から淨瑠璃・説經の正本を開板する正本屋であつたが、初代八左衛門の頃までは未だ微々たるもので、鶴屋・山本の二大正本屋には到底及ぶべくもなかった。しかるに自笑じしょうが三代目八左衛門を繼ぐに及んで、淨瑠璃正本以外に歌舞伎狂言本も板行し、更に淨瑠璃作者江島其磧を專屬作者に聘して役者評判記の出版にも手を着けた。その最初に出した『役者口三味線』(元禄十二)が意外の好評を博したので、引続き年々初狂言・二の替り毎に芸評を新刊し、老舗を誇る鶴屋・山本を圧倒して、芝居愛好者の人氣を独占するに至つた。これに味をしめて今度は浮世草子の出版に乗り出した最初の作が、『傾城色三味線』(元禄十四)である。作者はやはり其磧であるが、これまた読者から絶讃を以て迎へられた。というのは体裁・内容ともに一切、先に好評を博した八文字屋版の役者評判記に擬し、横本仕立、巻頭の女郎名寄なよめ、各巻の地理的排列、全部二十四章の短篇を一つの長篇小説として統一する傾城買送りの趣向など、すべての点に於て新工夫が認められ、一風の『御前義經記』(元禄十三)と共に、行き詰まつた當時の小説界に清新の氣を注入することに成功したからである。そして『色三味線』に續いて、『傾城連三味線』(宝永二)・『風流曲三味線』(宝永三)・『傾城一挺三味線』(宝永年間)・『傾城繼三味線』(同上)等の所謂三味線物が、同じく其磧の作自笑の出版によつて世に送り出され、それはまた風音堂の『風流連三味線』(宝永元)、一風の『野傾友三味線』(宝永五)・『傾城伽羅三味線』(宝永六)其他の模倣作を生んで、一時の流行を開くことになった。

『色三味線』に限らず、其磧の作品の殆どすべては西鶴本の剽窃・焼直しである。にもかかわらずかくの如き歡迎を受けたのは、読者が既に平凡陳腐な従來の好色本に退屈し、斬新な趣向と換骨奪胎の妙に富む其磧の器用芸に眩惑せられたために外ならない。しかしこうして次第に八文字屋本の評判が高くなり、作者自笑の名が喧伝せられてゆくにつれて、其磧は内心穏かでなかった。それは自己の影武者的存在に對する不平よりも、自笑の利益壟斷に對する不満であつたらしい。その結果其磧は『傾城禁短氣』(宝永八)を最後に自笑と袂別し、一子市郎左衛門の名義で書肆江島屋を開業して、八文字屋と對抗自作の出版を始めるのである。

一方八文字屋本以外の小説に眼を転ずると、作者には第一期以來活躍中の一風がいよいよ老熟の筆致を示し、新たに

錦文流・北条团水・青木鷺水・月尋堂・涼花堂斧磨等の浄瑠璃作者・俳諧師が作者陣に加わっている。江戸の奥村政信は有名な浮世絵師であるが、書肆を営む傍、挿絵を描きまた好色本に筆を執った。一般に野郎・傾城を扱った好色物が依然として小説の主流を成していたが、既に第一期の末に認められたように、好色物に於ける伝奇的長篇化の傾向が、浄瑠璃や歌舞伎狂言の影響と相俟って、当時の街談巷説に取材した長篇の事実小説を生むに至ったのは注目すべき新たな展開である。一風の『傾城武道桜』(宝永二)や其碩の『傾城伝受紙子』(宝永七)は、赤穂浪士討入の事件を扱ったため、当局の忌諱を憚って舞台を遊里に仮りているが、京都堀川の妻敵討を綴った森本東鳥の『京縫鎖帷子』(宝永三)並に錦文流の『熊谷女編笠』(宝永三)、心中事件の実説を集めた書方軒の『心中大鑑』(宝永元)、難波五人男処刑事件を小説化した一風の『達髪五人男』(宝永四)、淀屋辰五郎闕所追放に取材した文流の『棠大門屋敷』・福富言粹の『長者機嫌袋』(以上宝永二、大黒屋宗善の一代記を綴った湯漬翫水の『御入部伽羅女』(宝永七)等は、いずれもほぼ実説に基いて脚色した長篇小説である。

そのほかこの期に入って、西鶴の武家物・町人物・雑話物の系統を引いた作品が現われたが、或意味に於ては、これも亦好色本以外に新生面を拓かんとする新たな試みであったといえよう。しかしそれらの作品の多くは、作意に新趣向を欠くのみならず作者の教訓的意図が極めて露骨であり、西鶴模倣の痕は蔽うべくもなかった。その中やや見るに足るべきものは团水の『昼夜用心記』(宝永四)、月尋堂の『子孫大黒柱』(宝永六)・『今様二十四孝』(宝永六)ほか二三を挙げ得るに過ぎない。

第三期 (正徳二―享保二十)

前後二十五年にわたるこの期間は、即ち八文字屋本の中期(全盛期)である。その間自笑との反目確執から、遂に其碩は独立して書肆江島屋を経営し、前後七年間八文字屋に対抗して覇を争った事件もあったが、この両者の対立競争は図らずも却て新しい活気を注入する結果となり、名実共に八文字屋本空前の全盛をもたらし、そしてその全盛は両者の和

解提携後享保二十年の其磧死歿に至るまで続くのである。

前にも述べたように、其磧は宝永八年四月刊行の『傾城禁短氣』を最後として自笑と絶縁し、一子市郎左衛門の名義で八幡町通室町西へ入ル町に書肆江島屋を開き、正徳元年冬『寛濶役者片氣』を出したのを手始めに、『野傾旅葛籠』・『魂胆色遊懷男』(以上正徳二)・『諸分床軍談』(同三)の諸作を出版した。これらの好色本は、三味線物の連作以来、其磧得意の分野であつたからである。そして『旅葛籠』の序文に於て、従来の八文字屋本の作者は自笑以外に存在することとを暴露したが、未だ積極的に自己を主張するに至らなかつた。しかるに却て逆に自笑の方から、江島屋本こそまぎらわしき似せ本であると宣伝挑戦せられたので、正徳四年正月刊行の『役者目利講』の口上に於て、其磧は初めて従来の経緯を明かにし、自笑の仮面を世間の前に剥いで見せた。これを皮切りとして、以後毎年出版の役者評判記の紙上に、両者の論難攻撃が繰返された。そしてこれまでから八文字屋の出版界君臨を嫉視羨望していた鶴屋・山本・谷村・菱屋の書肆が一致して江島屋を後援し、両者の対立抗争は享保三年まで前後七年間続けられた。江島屋の方では、何分にも新見世のことゆえ、しにせの誇るべきものなく、最負の頼むべきものがない。ただ頼るは「色三味線作者」に対する馴染であり、其磧自身の技量のみである。そこで其磧は『商人軍配団』(正徳二)・『渡世商軍談』(同三)に西鶴以来の町人物を復活させ、『世間息子氣質』(正徳五)・『世間娘氣質』(享保二)に新たに氣質物の分野を開拓した。その苦心は書物の体裁の上まで及んでいる。これに対して八文字屋の方でも劣らず、代作者を雇入れて役者評判記を継続刊行する傍、『当世御伽曾我』・『風流東鑑』(正徳三)・『女男伊勢風流』・『愛敬昔色好』(正徳四)・『風流誰平家』・『義経風流鑑』(正徳五)等長篇の続物を出して読者の興味を繋いだ。もっとも其磧の言によれば、『御伽曾我』などは其磧の作であつたらしい。とすれば八文字屋の最も苦しい点は、「色三味線作者」に匹敵するだけの作者なく、従来の八文字屋の声価を維持することが出来なかつたところにある。これだけは大資本やしにせを以てしても、到底補い得るものではなかつた。その結果享保三年に至つて自笑の方から和解を申入れ、以後其磧の作は自笑・其磧連名、八文字屋・江島屋相板の形式の下に出版することと落着した。

こうしてこの八文字屋・江島屋の対立抗争は、当時の出版界を二派に分断するほどの一大事件であったが、とにかくこの事件を契機として、取材・構成・脚色は勿論書物の体裁に至るまで新工夫が試みられ、気質物や長編の歌舞伎・浄瑠璃のやつし物等を生んだことは意外の収獲であった。そしてこの二つの新しい形式は、両者和解後の八文字屋本に於ても中心を占めることになった。もともとも其磧が自笑と連名で出した八文字屋本にはやつしが多く、しかもすぐれた作品は少い。却て其磧が単独で菊屋もしくは菱屋から出版したものに、気質物・やつし物の傑作が多いのは皮肉である。

猶この期に於ける其磧以外の作者には、『怪談乗合舟』(正徳三)・『近代長者鑑』(正徳四)の作者落月堂操庵、『四民乗合舟』(正徳四)の作者紀海音、『風流譚軍談』(享保十七)の作者高木祐佐等があるが、いずれも取立てていうべき程のものではない。ただ一時筆を絶っていた一風が返咲いて、『今源氏空舟』(正徳六)・『乱脛三本鎗』(享保三三)・『色芝居百人後家』(享保三三)等を執筆し、これまた元禄七八年来文壇から遠ざかっていた九二軒鱗長が、『猿源氏色芝居』(享保三三)の一作によって再び復帰していることが注目せられる。

第四期(元文元一・天明三 一七三六―一七八三)

其磧の死に続く次の四十八年間は、八文字屋本の末期(衰退期)である。事実上の八文字屋本は、延享二年自笑先ず歿し、其子其笑・孫瑞笑改め李秀(白露)また相踵いで世を去り、瑞笑の弟素玉改め二代目自笑の代に至って、板木一切を大阪の書肆榊屋大蔵・同彦太郎に譲渡した明和四年(壬辰)正月を以て、全く滅び去ったものというべきであるが、その以後に於ても、小説界には増谷大梁・半井金陵・永井堂亀友・萩坊奥路・其鳳等の作者が輩出し、依然として八文字屋風の気質物を著わしている。従って八文字屋の退転以後天明に至る十七年間をも、八文字屋本の余風を存するものとしてこの期に加えるのである。

ところで前に帰って其磧の死は、何といっても八文字屋にとっては大打撃であった。其磧の死によってもたらされた作者陣の間隙は、其笑・瑞笑を新しく登場させ、作者兼顧問として国学者多田南嶺を迎えることによって埋められたけ

れども、しかし作者の貧困は蔽うべくもなかった。爾來十年昔日の全盛は再び八文字屋の上に廻り来ることなく、家運に対する憂悶の内に自笑自身も此世を辞し去るのである。この期に於ける八文字屋の有力な作者は南嶺であつたと考えられるが、その作品の多くは自笑もしくは其笑・瑞笑の名義になっているから、確実に彼の作と指定し得るものは少く、普通『武遊双級巴』(元文四)・『女非人綴錦』(寛保二)・『鎌倉諸芸袖日記』(寛保三)・『世間母親容気』(宝暦二)が彼の作として知られている。最後の二作は共に氣質物に属する作品で、もとより其蹟に及ぶべくもないが、才氣横溢、末期八文字屋本中の上作である。

南嶺の歿後、相変らず其笑・瑞笑・四代目自笑の名義で浄瑠璃・歌舞伎のやつし物が出版せられているが、果して実際に署名者である彼等の手に成つたものかどうか疑問である。

八文字屋以外の作者としては、内容はともかく数の上に於て多くの作品を遺した、前記亀友以下の作者が挙げられる。その大部分は其蹟以来の氣質物の繰返しで、新しい類型を求めて俳人・茶人・銀持・旦那・姑・医者・仲人にまで及んだ揚句、故意に歪められた人物を点出してわざとらしい滑稽を買い、常識的な教訓を振り廻すに終っている。それらの中にあって後年の読本の代表的作家上田秋成が、その若き日のすさびに和訳太郎の匿名を以て、氣質物の佳作を発表していることは注目すべきである。即ち『諸道聴耳世間猿』(明和三・『世間妄形氣』(同上)の二作がそれで、作者の鋭い觀察と諷刺は、平板空疎な作品の多い此期の小説中であつて、一つの異彩を放っている。

以上概観するところによつて、本書に採択した作者と作品の歴史的地位と価値はおのずから明かになったことと思う。ただ欲をいえば、同じ作者の作品の中でも従来未翻刻のものを収めたかったのであるが、底本選択の都合上実現することが出来なかつた。また江戸の作者の作品の一部も収めることが出来なかつたのは残念であるが、紙幅の関係上やむを得なかつた。次に所収の作品と作者について解説する。

好色万金丹

夜食時分作。元禄七年三月自序、同七月刊。

書誌 半紙本、五卷五冊。題簽 表紙左肩「入好色万金丹 一(一五)」。序題「好色万金丹」。目錄題・内題・尾題

「好色万金丹」(内題・尾題下に卷数を記す)。柱題ナシ(卷数・丁付ノミ)。挿絵 蒔絵師源三郎風。奥付 元禄七年七月吉日 板元 大坂中嶋屋治兵衛・同久保田喜兵衛相板、売捌 京都山崎屋市兵衛・江戸万屋清兵衛。(元禄九年正月、河内屋利兵衛刊、増益書)

籍目録大全 卷六、好色本の部に、冊数四、板元大坂、直段二反三分と記す。但し四冊は誤にて、元禄十一年十一月、九屋源兵衛再校板に五冊と改む。

諸本 一、求板再版本 半紙本、五卷五冊。初版三都書林連名本の奥付を削り、「元禄十丁丑年五月吉日 書林大坂伊丹

屋太郎右衛門」と埋木して改む。その他初版と異なる所なし。

二、改題改竄本 半紙本、六卷六冊。題簽 表紙左肩「絵入傾城太々神楽 一(一六)」。序題・目錄題・内題・尾題「傾城太々神楽」(内題・尾題下に卷数記入)。柱題ナシ(卷数・丁付ノミ)。挿絵 初版挿絵のほかに半丁分新補、画者未考。

初版巻頭の夜食時分の自叙を削り、改題の書名をもっともらしく見せかけた序文を加える。

傾城太々神楽序

江口・神崎・室・八嶋よりこと起て、当世うかれめのなさけにほだされ、恋の奴となるは性の悪ひうわきからといふは、無垢色里すっぽりのわけしらぬ人なり。朝に金をまふけて夕に捨とも可也と、腕久が家の集に書しは、もと色道所分しよわけ拔萃の中に見えたり。さるからさぞともうちかたらはど、命の根つぎとおもへど、げには少かすここつかたのありて、かゝが留守のま、親仁が碁打とき、書出しくばりにあるく折ふしなどぞ、ちよつとものになる。又世渡に辛気しんきをこらし、あるひは手代がしかればまゝならぬ世のうきふしもわすれ草、物のあわれもこれよりの、恋のたねまき置し梓のいたにちりばめ、六巻むつのまきとなして大臣の神慮をすゞしめ、色里に引なびける傾城太々神楽、穴面あなおもてしろや

宝永二ツ櫛床とりのとし暮の紋日

この奥付に「宝永二乙酉年十二月吉日 書林難波津伊丹屋茂兵衛」とある。井上和雄編『慶長以来書賈集覧』(大正五)によれば、